

咬合関係が喪失していた。

本症例に対して補綴的に下顎骨を連結し、顎運動と調和のとれた咬合の回復を試みた。あらかじめ、偏位した顎関節ならびに不規則な咬合平面を正常位に設定するため、顎関節部のX写真を参考にした。下顎運動機能回復の判定にはM. K. G. とE. M. G. を用いた。術前のM. K. G. の観察では左右非対称で不規則な図形が記録され、E. M. G. の観察では筋活動に不調和が認められた。補綴物装着後のM. K. G. の観察では正常有歯顎者にほぼ近似的な再現性のある運動様式が記録され、E. M. G. の観察では筋の活動量が増加し、左右同名筋の活動にも発現時間に調和がみられた。このことから、補綴物装着により下顎運動と調和のとれた咬合がほぼ回復していることが認められた。

しかし、下顎骨連続離断のために筋付着部の不均衡が生じて顎位が偏位した場合、その偏位した歯列弓を是正し、さらに咬合機能を補綴的処置だけで回復することはきわめて困難であり、それには限界があるように思われた。したがって、下顎骨再建術後の顎補綴によって咬合の改善をはかることが望ましい。

演題3 口腔外科領域における凍結療法 第5報 Spemby Cryosurgery System TCC-10 の適応について

○小口 順正, 小川 邦明, 藤森 俊介*,
斑目 幸恵*, 工藤 啓吾*, 藤岡 幸雄*

岩手県立中央病院歯科口腔外科
岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座*

口腔外科領域は凍結療法を適用する際、その適用部位が比較的直視可能であるところから好都合の分野と思われる。私達は過去2年半余の間に Spemby Cryosurgery System TCC-10 を用いて37例の凍結療法を経験し、各疾患における適応の範囲、及び手術手技について若干の知見を得たので報告する。

症例は総症例数37例、うち貯留のう胞が13例で最多、血管腫10例、義歯性線維腫2例、乳頭腫、扁平苔癬、Oral florid papillomatosis がそれぞれ1例ずつ、白板症2例、悪性腫瘍が7例であった。

貯留のう胞では13例中12例が有効で深在性でのう胞壁の厚いものには内容液吸引、再凍結で良い結果が得られた。血管腫は諸家の報告と同様に良い適応で、

出血もほとんど無く、組織修復も速やかで、本療法が first choice と考えられる。また、義歯性線維腫、乳頭腫にも効果的で他療法とともに選択されてよい療法と思われた。さらに扁平苔癬、Oral florid papillomatosis、白板症など粘膜疾患にも良い結果が得られ、凍結療法の適応拡大を示すものと思われるが、今後とも厳重な follow-up が必要であろう。悪性腫瘍例では表在性のものには効果的で特に悪性黒色腫の再発例には著効を示したが、他の末期癌症例では全例無効であった。

今回私達は Spemby Cryosurgery System TCC-10 による治療経験を報告したが、今後液化窒素を用いた凍結装置とも比較検討していきたい。

質 問：関山 三郎(第2口外)

① Lichen planus が cryosurgery にて治療したとのことですが、その機序についてはどのように考察していますか。

② 第4回歯学会例会における Ranula 症例で再発例がありました、その後の予後はどうでしたか。

回 答：小口 順正(県中病歯口外)

貯留のう胞再発例に対しては再凍結することで対処できる。

追 加：工藤 啓吾(第1口外)

Lichen planus に本法を用いているのは経験的に表在性粘膜疾患に有効であるとされているので、試用してみた。本例には有効であった。

演題4 (取り消し)

演題5 副腎皮質小胞体における Steroid 21-hydroxylation の調節に対する陽イオンの影響について

○伊藤 忠信, 村井 繁夫, 吉田 熙,
中本 義勝

岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座

牛副腎皮質小胞体の Steroid 21-hydroxylase activity に及ぼす一価、二価及び三価陽イオンの効果について検討した。

実験方法：実験は試料、 $0.01\mu\text{Ci } 4\text{-}^{14}\text{C-}17\alpha\text{-hydroxyprogesterone}$ 、小胞体(蛋白質質量として 0.06 mg)、0.2mM NADP、10mM Glucose-6-Phosphate、2 unit Glucose-6-Phosphate Dehydrogenase を含む総量 1 ml が、30°C 温槽内で、6分間 incubate

されて行なわれた。

結果：Na⁺ (0.001~100mM) 及び Ca⁺⁺ (0.001~1.0mM) は Steroid 21-hydroxylase activity には影響を及ぼさなかったが、その他の一価 (K⁺, Li⁺)、二価 (Mg⁺⁺, Mn⁺⁺, Ba⁺⁺, Cd⁺⁺)、三価 (Al⁺⁺⁺, La⁺⁺⁺, Fe⁺⁺⁺) 陽イオンはすべて抑制的に働いた。

演題6 局所麻酔薬の麻酔深度と持続時間

○中本 義勝, 村井 繁夫, 伊藤 忠信

岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座

モルモットの mental nerve block 法と、歯肉の電気刺激により発現する疼痛反応の発現閾値の上昇率を指標として、種々の濃度における lidocaine の麻酔作用を、麻酔深度 (depth) と麻酔作用持続時間 (duration) の2つのパラメータから検討した。lidocaine 単独投与の場合、depth および duration は共に lidocaine の濃度に依存して増加した。5万倍の epinephrine (Epi.) を含む溶液では、depth は0.25%~1%では濃度に依存したが、1%と2%溶液の間には差がなかった。

duration はEpi. を添加した場合、0.25%~2%の濃度においてほぼ100分と一定であった。

今回の実験結果は、局所麻酔薬の depth と duration は、投与条件によって変動することを示しており、局所麻酔薬の効力は、depth および duration の両要素から判定されるべきことを示唆する。

質 問：鈴木 隆 (口腔生理)

刺激方法などをお聞きしたい。

Pain, mechano-, および themal receptor などの混在する歯肉を刺激されるよりも、pain receptor だけ存在する歯髄刺激をされた方がよろしいのではないのでしょうか。

回 答：中本 義勝 (歯科薬理)

応答刺激は白金製の双極電極 (間隙2mm位) をモルモットの歯肉に軽く接触させ、10Hz, 0.1m sec の条件で2秒間刺激しました。

歯髄を利用するのは、理想的かと思いますが、今回は、操作が容易な、簡便な方法という意味で歯肉を用いました。

追 加：伊藤 忠信 (歯科薬理)

末梢神経に対する局麻剤の効果は all or none の法則に従っている。しかし、臨床面に於ては次第に麻酔効

果が大となり、麻酔状態に達しその後次第に回復する。このようなことは局麻剤の法則に合致しないように思われるが、組織の pH, 薬物の pKa, 薬物と神経の親和性、受容体等の問題によった麻酔効果に差異、即ち不完全麻酔完全麻酔等の差異が生ずるものと考えています。

質 問：佐藤 敏彦 (歯科薬理)

1. 実験動物モルモットの刺激に対するなれはないかどうか。

2. 臨床的には、例えば大手術のあとなど窩洞形成時に痛みがうすくなると言われておりますが。

回 答：中本 義勝 (歯科薬理)

1. 刺激に対するなれだけでなく、固定されること、注射されることなどに対しても、なれがでてきます。このなれによって動物の取りあつかいが容易になりますし、normal pain threshold も4~5 Volt と一定になってきます。なれが実験結果にマイナスの影響を及ぼすことはないと思います。

2. 大手術のあとのことはわかりませんが、ただお産のあと、あまり日時を経ない婦人が歯科治療を受けたとき、普通なら痛みをうったえるであろうと思われる刺激によく耐えることができるという臨床の先生から聞いたことがあります。これは、いたみ閾値に精神的な因子が影響するため、いたみ閾値が純粋な受容でないためだと思えます。

演題7 多形性腺腫一組織化学的検索、特に筋上皮細胞の存在について一

○竹下 信義, 畠山 節子, 野田 三重子,
鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

小唾液腺に発生した多形性腺腫について臨床病理学および組織化学的に検索し特に筋上皮細胞の存在について興味ある結果を得た。

資料：1976年から1978年2月までに本学歯学部付属病院口腔外科を受診し、小唾液腺に発生した多形性腺腫と診断された8症例

結果：臨床的概要；男性3例、女性5例であり、発現年齢は21歳から90歳にわたり平均59歳であった。また発現部位は口蓋部、頬粘膜、上唇であったが口蓋部に最も多くみられた。摘出された腫瘍は約27.1×23.4mmであった。